

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	その他指導内容や指導方法において特徴ある工夫が行われている実践事例
-------	-----------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

徳島県鳴門市

○学校名

鳴門市立鳴門市鳴門中学校

○学校のURL

<http://e-school.e-tokushima.or.jp/naruto/jh/naruto/html/htdocs/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】1年生2学級、2年生2学級、3年生2学級、
【特別支援学級】3学級、【合計】9学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】182人（平成26年11月17日現在）
（内訳：1年生71人、2年生55人、3年生56人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成24・25年度 文部科学省人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

知・徳・体の調和のある発達を図り、個性豊かで社会の変化に対応できる、広い社会性を身に付けた生徒の育成

【人権教育に関する目標】

自分や仲間の大切さを実感し、自他の人権を尊重するために、自ら感じ、考え、行動する生徒を育成する。

○人権教育に係る取組一口メモ

行動化につながる指導内容・方法等の工夫改善
～「感じ、考え、行動する」活動を意識的に設定した学習の展開～

○人権教育にかかる取組の全体概要

【研究主題】

自分や仲間の大切さを実感し、自他の人権を尊重できる生徒の育成を目指す人権教育 ～自ら感じ、考え、行動する生徒を育てる～

【研究の内容】

研究主題の解明に向けて、次のような研究内容に取り組むこととする。

○人権教育研究事業

- ・[第三次とりまとめ]や「徳島県人権教育推進方針」に基づいて、学校の教育活動全体を通じて人権教育を推進する。
 - ・学校の教育活動を人権教育の視点から見直し、人権感覚を高め自他を大切にす
る生徒の育成を目指し、有効化を図る。
 - ・学校や地域の状況や実態を把握し、特長を生かした取組や参加的・体験的活動
等、生徒が主体的に参加できる活動の充実を図る。
- 人権学習研究事業
- ・「“あわ”人権学習ハンドブック」を活用し、生徒が主体的・実践的に学習に
取り組む指導方法について研究を進める。
 - ・鳴門教育大学との連携を図りながらSRPDCAサイクルを踏まえた人権学習
の改善と充実を図る。
 - ・「体験的な学習」や「参加型の学習」を通して感じ、考え、日常生活において
人権感覚豊かに行動できる生徒の育成を目指す指導内容や指導方法について研
究を進める。
- 関係諸機関との研究事業
- ・PTA人権研修部や関係機関等と連携を深め、人権教育を推進・充実させる。
 - ・鳴門市人権教育推進協議会や鳴門教育大学と連携し、指導方法の工夫改善を図
り、保護者や地域の人権意識の高揚を図るための啓発活動を推進する。
 - ・「開かれた学校」として、学校の人権教育の内容や取組を積極的に公表し、保
護者や地域住民が生徒と共に学ぶことができる人権教育を創造する。
 - ・校区内の幼稚園や小学校との連携を充実させ、自尊感情の育成や人間関係づく
りにおいて有効化を図る。

3. 特色ある実践事例の内容

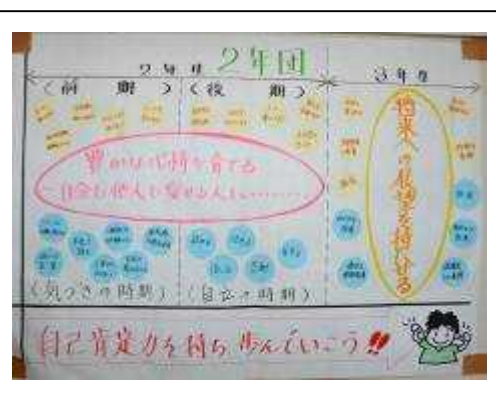
本校は、平成24・25年度文部科学省人権教育の指定を受け、人権教育について研修会や研究授業、講演会等、研修を進めてきた。研究主題は、『自分や仲間の大切さを実感し、自他の人権を尊重できる生徒の育成を目指す人権教育 ～自ら感じ、考え、行動する生徒を育てる～』で、自分や仲間を大切にしたい生き生きと活動する生徒の育成を目指し、豊かな体験活動を取り入れた学習を展開してきた。人権学習の授業実践、人権コンサートや人権劇、人権文化祭の見学を中心に、地域を知る学習や職業体験等、友達と協力して活動する学習も積極的に取り入れてきた。それぞれの学習を通して自分の内面を見つめられるようになってきた生徒も増えてきた。しかし、実生活に起こった問題について、自分自身の問題として捉えられず、学んだことを反映できていない生徒も多かった。

以上のような現状から、学校生活や社会生活の中で、共に支え合って行動する生徒を育てていくために、様々な手立てにより取り組んだ。

(1) 学校マネジメント研修



協議の様子

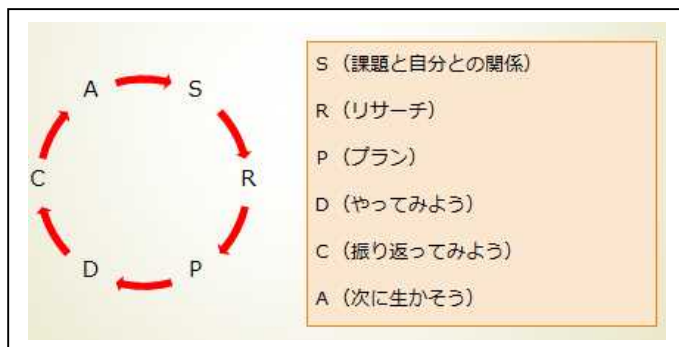


卒業までのラフシナリオ

生徒の実態を見つめ、どのような生徒を目指し、その生徒像に向けてどのような指導をしていくべきか、具体的なイメージやビジョンを持って取り組んでいく必要がある。年度末には、研修や授業実践の成果のあったものと改善すべきもの、アンケートによる生徒の実態等の確認を行い、次年度の方向性を検討してきた。平成24年度から毎年度当初には、学校マネジメント研修を実施している。年度末の反省をもとに、4月当初に学年団に分かれ、“中学校卒業までに身に付けさせたい力”を考え、教育の目標を立てていく研修を行っている。

この研修では、まず始めに学年生徒の現在の様子を分析し、何が課題であるかを検討した。さらに、いつまでにどのような力を付けさせたいか、中期の目標を立て、そのための手立てを考えていった。この研修で出された目標や考えは、模造紙にまとめて校長室に1年間掲示し、機会を捉えて評価しており、SRPDCAの取組の基本としている。新年度に変わっても前年度の指導を振り返り、再検討をして修正を加えている。この研修の実施により、学年団で意識を共有するとともに、指導の連続性を確立していくことを目指している。

(2) SRPDCAサイクルを意識した取組



鳴門教育大学の葛上先生より、「SRPDCAサイクルを意識した人権教育」について指導を頂き、様々な活動の取組について確認を行った。

「S スタンディング」について私たちは、「拠って経つところ」と理解して取り組んできた。様々な

な問題への取組を始める前に、教師自身がその問題と深く関わり、生徒が「自分の問題として」捉えるように準備していくことである。この「S」を充実させることによって、行動化につながる学習展開を目指していくことを重視して進めた。

「S」を充実させる取組として様々な人権問題に関わる研修を行い、地域や関係機関の力を借り、教師自身が「自分の課題」として捉えることを重視した。識字学級との交流、ハンセン病についての講演と人権劇の観劇、秋田町空襲を体験されたゲストティーチャーを招き、生徒が自分の問題として取り組む意識を高める活動を仕組んだ。事前の研修や打合せで、教師自身が学ぶことが大きな力となった。

(3) 生き方のスキルを学ぶ「絆学習」の導入



学校生活において、共に活動する場を設定し、自他のよさに気付き仲間と協力することのすばらしさを感じさせたいと考えて取り組んでいた教職員から、友達との関わりや仲間づくりに課題があるという声が上がった。その打開策として Lions-Quest 『思春期のライフスキル教育』プログラムに取り組んだ。平成

24・25・26年度に、講師を迎え研修を受けた。平成24年9月以降、「絆学習」と名付け、道徳・特別活動の時間に取組をスタートした。

学校生活に多くの課題を抱え、授業に入れなかったり、仲間と共に活動できなかったりした生徒もこの「絆学習」の時間は、学級の友達と一緒に活動ができた。安心して自分の意見が出せる場と時間がつくられたからだと考えられる。また、グループでの話合いが非常にスムーズになり、活発に意見を出し合ったり、まとめたりすることができるようになった。

(4) 人権学習の単元を意識した実践を展開

「感じ、考え、行動する」生徒を育成するため、人権学習の流れの中に「感じる」「考える」「行動する」をはっきりと意識した活動を取り入れることによって、指導計画の充実を図ることとし、「人権学習の単元」と名付けて取り組んできた。

年度末にアンケートによる生徒の実態の確認を行い、次年度の方向性を検討した。その内容を受け、年度当初に実施した学校マネジメント研修で、各学年の教員が考

1年生

単元2 共に生きる

★ 指導月 9月～12月

★ ねらい

- 一人一人の個性を理解し、互いを認め合うことができる生徒を育てる。
- 障がい者に対する差別をなくし、障がいのある人と共に豊かな生活ができる社会をつくるために、自分ができることを考え、行動できる生徒を育てる。

★ 単元の指導計画(19時間)

「障がい者ってどういうこと？」 「障がい者は今」(道徳) 2時間

資料から障がいとは何かを考えることを通して、障がいは「違い」の一つであることに気付かせる。

ユニバーサルデザインを通して考えよう 「ユニバーサルデザインは何？」 「わたしの願い」 (総合的な学習の時間) 3時間

ユニバーサルデザインを調べ出したものは何かを考えるを通して、すべての人が平等に生きていくために自分ができることを考えさせる。

四つのバリアについて考えよう 「市民を取り巻く四つのバリア」 (総理府障害者白書) 2時間 (総合的な学習の時間)

ユニバーサルデザインを通して一人一人の命は、多くの人の愛情と思いで支えられて築かれたものであることを実感させること。すべての人が、平等に生きることを望んでいるもの。一つの人の心にあることに気付かせる。

講演 かけがえのない命 (道徳) 2時間

講演を通して一人一人の命は、多くの人の愛情と思いで支えられて築かれたものであることを実感させること。すべての人が、平等に生きることを望んでいるもの。一つの人の心にあることに気付かせる。

1A ちがいを豊かに 「ちがいをどうすれば？」 (道徳) 2時間 (あわ人権ハンドブック)

一人が不利な状況に陥る。自分とちがいを理解することで、ちがいを「ちがってないちが」の考えを持ち、相手の受け入れられるよう豊かに生きることに気付かせる。

1B 心のバリアフリー 「ユニバーサルを創る」 (道徳) 2時間

障壁だけでなく、心もバリアフリーにすることで誰もが暮らしやすい環境になることに気付かせる。

障がい者支援施設の人と交流しよう (総合的な学習の時間) 6時間

交流を通して、相手の立場に立って考える想像力や思いやり、それを行動に移せる勇気力を育てる。生活の中で互いの違いを認め、違いがいつかある関係を築くことができるようにする。(実習)

生徒の意識のつながりを大切にした人権学習の展開をめざす

鳩門中学校人権学習の単元として

- 課題が認識され、解決に向かうまでのひとまとまりの学習
- その学習の間、生徒は課題の探求や解決に一直して向かう
- 「感じ、考え、行動する」活動を位置付ける
- 生徒の考えが自然に展開し、発展するような流れを作る
- 適切な資料・つながりのある活動を位置付ける

えた目指す生徒像とそのための具体的な手立てをもとに、生徒が「感じ、考え、行動する」ことを目指して取り組んできた。平成26年度の1年生では、9月から12月にかけて、「共に生きる」という単元で取り組んだ。

(5) ホワイトボード・ミーティングの導入

本校では、平成24年度末から「ホワイトボード・ミーティング」を授業の中に取り入れている。ちよん せいこさん(株式会社ひとまち 代表取締役)の信頼ベースの「学級ファシリテーション講座」で研修を受けた教職員がリードし、生徒の話し合いのスキルを高め、「教室の中に、聴き合う、学び合う、つながり合う信頼関係」を

「ホワイトボード・ミーティング」の導入

話し合いのスキルを高め、聴き合う、学び合う、つながり合う信頼関係を育む

育むために、様々な授業で活用してきた。道徳や人権学習では、なかなか発言できない生徒がどの学級にもいるが、ホワイトボード・ミーティングを導入したことによって、自分の意見が大切にされ、認められたと実感でき、発言が苦手な生徒も安心して発言できるようになった。

(6) 「アサーショントレーニング」「リフレーミング」の実践

「アサーション・トレーニング」や「みんなのリフレーミング」で、スキルを習得

受け身的な自己表現、攻撃的な自己表現、そしてアサーティブな自己表現を通して、どの表現が最も対人関係をよくするものであるかを考えさせた。生徒たちが3つのスタイルで会話を考えているとき、最も考えやすかったのが攻撃的表現である。いかに私たちがふだん、相手のことを考えず、自己中心的な発言をしているかという

ことに気付かされた。2年生の授業では、非言語的なコミュニケーションにも注意を払いながらロールプレイを実施した。

(7) 研究授業・授業研究会の活性化



目標を達成するためのよい授業を求めて研究授業を行い、互いが学び合う場とした。授業では体験的参加型学習を取り入れ、生徒が積極的に学習に取り組む学習形態の工夫を心がけた。参観者は「授業評価シート」をもとに授業を検討し、KT法で授業の成果や課題を捉

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(1) 行動化につながる話し合いを意識した取組の展開



行動する生徒を育てるためには、「考える」活動をもとにした深い話し合いが大きな鍵になることを実践の中で感じてきた。形だけの結論を述べ合って、行動化につながらない人権学習にしないために、どのような問題をどのように取り上げて話し合いを組み立てていくのかが課題となった。

(2) 指導方法の工夫・改善

① SRPDCAサイクルを意識した取組で意欲を高める

鳴門教育大学の葛上先生より、「SRPDCAサイクルを意識した人権教育」について指導いただき、様々な活動の取組について確認を行った。「S スタンディング」について私たちは、「拠って立つところ」と理解して取り組んできた。様々な課題への取組を始める前に、教師自身がその問題と深く関わり、生徒が「自分の問題として」捉えられるように準備し、この「S」を充実させることによって行動化につながる学習展開を目指していくことを重視した。「S」を充実させる取組として、様々な人権問題にかかわる研修を行い、地域や関係機関の力を借りて、教師自身が「自分の課題」として捉えることを重視した。生徒が自分の問題として取り組む意識を高めるための活動を仕組んだが、教師が事前の研修や打合せ等で学ぶことが多く大きな力となった。

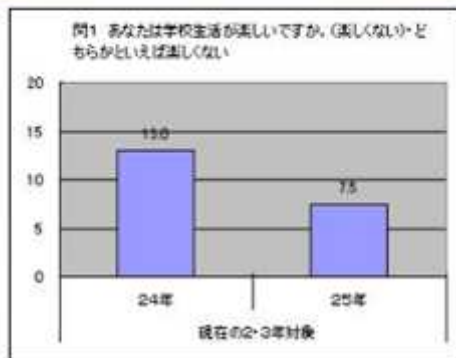
② 人権学習の単元を意識した実践を展開する

「感じ、考え、行動する」生徒を育てるために、人権学習の流れの中に「感じる」「考える」「行動する」をはっきりと意識した活動を取り入れることによって、指導計画の充実を図ることとし、「人権学習の単元」と名付けて取り組んできた。

単元を計画して生徒の意識の流れを大切にすることによって、教材や資料をもとにした学習を自分の生活と結び、考えたことを行動に移す生徒を育てることに取り組んできた。学習に取り組む中で、「『感じる』『考える』は何度も往復する」ことや、「よりよい行動するためには、深い話し合いが求められる」ことが明らかになった。1時間の授業や一つの資料・教材を取り上げた学習だけでなく、「学校マネジメント」を受けた長いスパン、1年間の指導計画、単元の指導計画を意識した取組により、目標に向けた方向性のはっきりした学習や活動の展開につながったと考えられる。

5. 実践事例の実績、実施による効果

・学校が楽しくない生徒 13%→7.5%



○「感じ、考え、行動する」生徒が育ったか
平成24年度、この研究をスタートさせたときの本校の生徒には多くの課題があった。仲間への迷惑行為や暴力、不登校があり、様々な場面で自尊感情の低さが目立った。それは、毎年行っている「人権に関する意識調査」にも表れていた。一人一人の生徒に、まず自分を好きになってほしい、その上で周りの人とつながって、その人も大切に生きてほしいと願い、試行錯誤を繰り返しながら人権教育に取り組んできた。それが実際に

成果として表れているかどうかを検証するために、平成24年6月に行った「人権に関する意識調査」の項目のうち、特に課題であると思われる5項目について、平成25年6月に行った調査結果と比較してみた。同じ対象の意識の変化を見るために、今年度の2、3年生（昨年度の1、2年生）を比較の対象にした。

これをみると、「あなたは学校生活が楽しいですか」という問1に対して「楽しくない・どちらかといえば楽しくない」と答えた割合が13.0%から7.5%に減ってきていることがわかる。

具体的に人権意識がどれくらい高まってきているのかを確認するために「評価アンケート」では、「他人の人権を侵害する行為は、どんな理由があっても行ってはならないと思うか」という問いかけでは、どちらの質問にも97%以上の人々が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えている。平成24年度の生活の様子から考え、生徒の中に人権意識が高まったと捉えている。しかし、数値は減っても、まだまだ課題をもっている生徒はいる。これは、我々の取組が、まだ最初の一步であることを示している。

また、左のグラフから、学年が上がるごとに人権意識が高まっていることが確認できる。どの生徒もそれぞれの課題と向き合いながら成長をしている。また、友達を見るまなざしや困っている人に手を差し伸べようとする行動の中に、人権感覚が

育ってきていることも確かである。私たちは生徒の中に「感じ、考え、行動する」力が育ってきていることを実感している。これからも、人権感覚や行動力を育てるためにこれまでの取組を力強く継続し、人権教育を進めていきたい。



6. 実践事例についての評価

私たちは、本校の抱える課題から出発し、「私たちが目指す生徒の姿」に向かって試行錯誤を繰り返し、人権教育の側面から生徒たちの育ちに関わってきた。その結果、どの学年でも生徒の自他を大切にする行動に変容が見られた。多くの生徒が

自分自身の育ちを自覚し始めている。しかし、「人権に関する意識調査」や「評価アンケート」の結果からわかるように、すべての生徒に変容があったわけではない。

課題1は、まだ人権課題を抱えたままの生徒が目の前にいるということである。生徒の様子を観察していると、「集団づくり」という面からも「人権意識の高揚」や「社会性」という面からも明らかに成長しているのだが、自己の変容を認識することができず、自己評価の低い生徒がいる。また心の奥深いところで不安が残っており、堅い信頼関係まで育っていないこともわかる。生徒同士・生徒と教師のどちらも時間をかけて、本当の信頼関係を育てていかなければならない。そして、すべての人が幸せに暮らせる社会の担い手に育てるための取組を続けていきたい。

課題2として指導計画の充実がある。昨年度の課題を受けて、平成25年度は単元という発想から指導計画を工夫して人権学習を展開してきた。体験的な学習や、ゲストティーチャーを招いての講話など、生徒が豊かに感じ、深く考える学習を目指して様々な学習活動を展開した。しかし、単元を意識した学習を展開する中で、課題も出てきた。例えば3年生は、識字学級との交流会に出かけ、たくさんのことを学んだ。生徒が作成した「識字新聞」には、就職や結婚の問題が取り上げられていた。しかし、10月にゲストティーチャーを招いて結婚差別についての話を聞いたとき、まるで初めて課題に接したような感想を述べた生徒がいた。様々な学習活動を通して、生徒が成長したと私たち教師は感じてきた。しかし、これまでの実践を検証し生徒の状況を丁寧に見取って、本当に目標を達成する学習になっているのかを常に意識しながら今後の学習計画を工夫していかなければならない。

課題3は教員の研修という面からの課題である。平成24年度から3年間、私たちは「Lions-Quest」「ホワイトボード・ミーティング」「SRPDCA学習サイクル」などの研修を通して、指導の方法や計画の立て方、学習を支える様々な技能等について習得してきた。目指す生徒を育成するために、それらを人権教育の中でどのように活用していくのが効果的なのか引き続き研究していく必要がある。

これまでの取組を検証した結果、新たな課題も確認できた。残された課題の解決を求めながら、いつの時代も「感じ、考え、行動できる」生徒の育成を目指して今後も取り組んでいきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

鳴門市立鳴門市鳴門中学校

この事例の目的は、自分と仲間の大切さを実感し、自他の人権を尊重できる生徒の育成におかれている。この目的達成のために学校研修が実施されている。①生徒の実態分析、②課題の検討と手立ての共有、③方向性のある実践、④振り返りと再検討というプロセスからなるが、このプロセスを経ることで、教職員が「学年団の意識を共有し」「指導の連続性を確保する」ことが目指されている。その際、校長室に1年間掲示される「研修成果の模造紙」が「振り返り」、「再検討」、「修正」などに活用されている。

中学生期の特性を「思春期ライフスキル教育」のプログラムに学び、道徳や特別活動の実践による＜絆学習＞が生徒個々の自己形成やライフプランの志向に資している。安心して意見を言える場を共有する、グループの話合いがスムーズにできる、互いに活発な意見を出し合うなどの生徒像がみえる。また、生徒同士のホワイトボード・ミーティングにより、自らの意見が＜大切にされる・認められる実感＞は個々の人権感覚を豊かに育んでいる。アサーショントレーニングやリフレーミングの実践も功を奏している。